

戸田・浅野奉行の就任

弘化四（一八四七）年二月、浦賀奉行・一柳一太郎は日光奉行に転役となり、その後任に日光奉行であった戸田氏栄が充てられた。この人事はどうみても一柳が左遷させられたと思われる。一柳はマンハッタン号来航の時に活躍した土岐丹波守頼旨が、大目付に転役した後任で浦賀奉行になった。一柳の父・猷吉も浦賀奉行を務めたので親子二代の奉行であり、石高も五千石と旗本としても立派な格式をもっているのに、石高五百石の戸田とポストをチェンジしたことだけでも左遷された可能性が高い。

さらに、戸田は着任すると伊豆守に叙され、浦賀奉行の席次が遠国奉行の中で、長崎奉行の次席となった。これは浦賀奉行所が重要な役割を担っていることの証しである。

これだけでも浦賀奉行所の歴史のなかで注目に値する事柄なのに、五月になると大久保忠豊に代わって浅野中

務少輔長祚が浦賀奉行に就任した。文政二（一八一九）年に奉行が二人制になってからこれだけ短期間に二人の奉行が交代したのは初めてであった。それだけ幕府が浦賀奉行に期待したいこととは何であろうか。

時の老中・阿部伊勢守正弘は、海防掛に再三にわたって異国船に対する幕府の方針を「薪水給与令」から「打払令」へ戻したらどうであろうかと諮問していた。しかし、その前提となるのは、警備体制が整わなくて「打払令」を発令することはできない。

阿部が描いている警備体制の強化の一つは、江戸湾の警備を二家から四家にする事で、弘化四年二月に三浦半島を川越藩と彦根藩、房総半島を忍藩と会津藩で警備することは発令し、さらに浦賀奉行所は異国船に対する応接を専門とすることに決まった。陸上での警備はほぼ予定した筋書で進んでいったが、海上の警備に小型の軍船の導入があった。この阿部構想を実現できる人物として選ばれたのが、二人の奉行であったと思われる。二人への評価は水戸の斉昭に宛てた手紙でも「この度の奉行は兩人とも文武の心掛け厚く、四家への気うけもよろしい」と記している。

この年の九月に諮問を受けた浦賀奉行は、近年西洋で用いられている「脚船スloop」は操船が手軽で、破船する心配も少なく、貫目以上の大砲も搭載でき、従来の押送船より数段に優れているので、この船を建造すべきであると意見を述べた。「脚船スloop」とはどんな船であろうか。どうもバッテリー（カッター）のような小型船と思われる。

さらに、剣付鉄砲の浦賀配備、小型船に搭載可能なハンドモチール筒の鑄造、洋式の砲術指南役の派遣要請など海上ばかりでなく、陸上での洋式の軍事技術の導入も積極的に図っていった。

これらが形となって表れてくるのは、嘉永二（一八四九）年から三年にかけてであり、浦賀で建造された洋式の蒼隼丸であり、灯明堂近くには玉薬製造所が置かれ、今までのように火薬使用を幕府へ伺いながらすることもなくなった。

この二人が行ったことは、浦賀奉行所の仕事を一新し、近代へ足掛かりを作ったことであった。（了）